

いるのである。

## 第二章

## ●法然の安心論

### ●第一節 安心について

法然は善導の意を受け日本において浄土教を確立した。当然その教義の骨格である安心・起行論についてもそれを継承している。ただ継承するだけでなく、それをさらに一般大衆に近づけた解釈を施し、平易な説明を加えている。また、善導の所説をさらに発展させた法然独自の見解も含まれている。

法然はこの安心とは何かということよりも、むしろ安心の中身である三心について多くの言葉を残している。つまり安心という言葉は起行に対する言葉として使用しているのである。安心の定義としては『浄土宗略抄』（『法全』五九三頁）に「安心と云は、心つかいのありさま也」と述べられている。そこでは安心の位置付けについて、

浄土門にはいりて、おこなふへき行につきて申さは、心と行と相応すへき也

〔法全〕五九三頁

とあるように、浄土往生を願う人は心と行とが一体となった修行が必要であるとし、安心起行を一体と見た行体系を想定している。このように法然は、安心起行の分別は善導をそのまま継承していると見て差し支えないと考えられる。

なお、『昭和新修法然上人全集』（『法全』）には、『安心起行作業抄』が収載されている。しかし、文体から法然のものとは考えがたくここでは取り上げないが、これには少し突っ込んだ解釈がなされている。

安心の内容については、『浄土宗略抄』の文脈から、あるいは『御消息』の

その心といふは、観無量寿経に積していはく、もし衆生ありて、かのくに、むまれんとねかはんものは、三種の心をおこして、すなはち往生すへし

〔法全〕五七七頁

という文に見られるように『観経』の三心を当て論じている。この部分についても善導をそのまま継承していると言えるであろう。